

アガペーに会う（第4回）「アガペーが育む新しい人間関係」

エフェソの信徒への手紙 4 章 32 節

互いに親切で憐れみ深い者となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

ヨハネによる福音書 13 章 34～35 節

あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私あなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。

前回のウェルカムサンデーでは、ヨハネ 8 章を扱い、主イエスにある「無条件の愛」と出会った一人の女性の姿を通して、私たち一人ひとりにも差し出されている「赦しと受容」についてお話ししました。今日は、その愛に出会った私たちが、どのように周りの人と関わっていくことができるのか——「アガペーが育む新しい人間関係」について、ご一緒に考えてまいりましょう。

誰もが人との関係の難しさを感じて生きてこられたのではないのでしょうか。家族、友人、教会の中でも、気を遣うこと、すれ違うこと、言葉が行き違うことは、少なくありません。

- ・ そういう意図で言ったのではないのに…
- ・ 誤解が誤解を生んでしまう…
- ・ お互いに真意を分かり合えないままモヤモヤとし続けている…
- ・ 一人ひとりの内にある「真実」が異なる…

そういう経験はほとんどの人に共通しているのではないかと思います。「相手の心を聞く」に至らないまま崩れていく関係というのは、人間社会に無数に存在します。それだけに、私たちキリスト者は、「自分の罪さえ赦されたらそれで終わり」ではなく、「赦されたところから始まる新しい人間関係」をどう築いていくかが、いつも問われているのです。

互いに親切で憐れみ深い者となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。（エフェソ 4:32）

この“赦し合う”という言葉は、深い意味を持っています。それは「相手の過ちをなかったことにする」という意味ではありません。「その痛みを知りつつも、それでも関係を断たないことを選ぶ」——それが赦しの本質です。そして、当事者の言動と行動にどのような背景があるかを考え理解すること、その人の過去も現在も否定せず、そのまま受け止めていくことが、アガペーに基づく関わり方なのです。そこには、受け止める側に「一種の痛み」が伴います。無条件の愛とは、それを注ぐ側の忍耐と赦しが前提にあるからです。神様は、まさ

にそのようにして、私たちとの関係を保ち続けてくださっています。ここに十字架の福音の「犠牲」としての意味が現れている。神様は私たちを無条件に愛してくださっていますが、それは主イエスのいのちを代価とした「罪の赦し」の結果なのです。神が私たちを赦されたのは、私たちが変わったからではなく、**赦すことが神の愛のあり方だから**です。では、私たちはその愛を受けた後、どう歩んでいけばよいのか。私たちの隣人との関係に、アガペーはどのような影響を及ぼすのでしょうか。主イエスは、弟子たちにこう言われました。

あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。（ヨハネ 13:34-35）

主イエスが示された愛——それは、相手に期待してではなく、先に与える愛。自分の痛みや弱さを知っているからこそ、他人にも優しくなれる愛です。もちろん、私たちは完全ではありません。すぐに怒ってしまうこともあるし、相手を赦せないこともある。しかし、それでも「アガペーに生きたい」と願うことから、新しい関係は始まっていきます。教会とは、赦された罪人の集まり。だからこそ、「隣人を理解し受け止める」ということを実践する場であり、人が癒されていくべき「リハビリの場」でもあるのです。ぶつかったり、すれ違ったりしながらも、共に生きていくことを学ぶ場所。そして、失敗しながらも、何度でもやり直せる場所です。

イエス様が語られた有名な「放蕩息子」の譬え話があります（ルカ 15 章）。父親の財産を早々に受け取り、散財し、無一文になって帰ってきた。まさに勘当されても仕方のない行いをした息子でしたが、彼は行き先で人生に行き詰まり、父の許へ帰ることを決断しました。どう父親に謝るかを何度も口ずさみながら帰ってきた息子を、父親はそのことばを聞くまでもなく、ただ受け入れ抱擁しました。周りの人々がどんなに息子を裁こうとも、父親だけは彼の「父親」であり続けたのです。この父親にとって大事だったことは、息子の行為が改善されること以上に、その存在そのものだった。「帰ってきた」、それだけで十分だったのです。この物語ほど、「アガペー」を体現しているものはないでしょう。

主イエスから「互いに赦し合いなさい」と命じられているということは、つまり、私たちは赦しを必要とする関係の中で生きているということです。「赦し」や「受け入れ」は、特別な技術ではありません。それは、神の愛に触れた者が、自分の弱さと他人の弱さを**並べて見ることができる心**です。自分も無条件に受け入れられたのだから、同じように他人を無条件に受け入れていく。このアガペーに基づく関係は、私たちの教会生活、日常生活をじわじわと変えていきます。醸し出す雰囲気そのものが柔らかくなり、人を裁いていた目が、受け入れる目に変えられていき、互いの存在に感謝できるようになり、「ここにいても大丈夫」と感じられる空気が生まれていくのです。これこそが「キリストの香り」です。無条件の愛

を身に纏っている人からは、まさに「キリストの香り」が放たれている。アガペーなる神様は、あなたをただ個人的に救うだけでなく、“**関係の中で回復していく**”ことも願っておられます。人は、傷あるままの自分を受け止めてもらえると、その傷に気づいていればいるほど、「このままの自分でも大丈夫なんだ」という深い安堵感を覚えます。しかしながら、通常の人間の反応は、そうではありません。

「そのままのあなたでは到底受け入れることはできない」

「私が許容できる状態になってから来てください」

そういうメッセージを暗に発しており、その「裁かれる感覚」によって、人は心の居場所を失うのです。

もう一度、レンブラントの「放蕩息子の帰還」の絵をご覧ください。父親が息子を抱擁する姿を、眉をしかめて見つめている周囲の人々、そして、その背後に亡霊のように映っているもう一人の息子の姿。人は基本的に「罪を犯した人」を裁く傾向があるのです。しかし、アガペーはそうではなく、「あなたがどのような状態であったとしても、あなたの存在そのものが大切なんだよ」と、ありのままを受け止めていく。この「無条件の愛」に触れるときこそ、人は真に変えられていくことができるのです。もしこのストーリーに続きがあるとするなら、放蕩息子は、周りの人々の厳しい視線や叱責によってではなく、父親の無条件の愛の中で造り変えられていったことでしょう。そして、もう一つ見落としてはならないのは、この父親もまた「人々の無理解」を引き受けながら、自分の息子を受け止めているという点です。私たちの教会生活の現実も、この「放蕩息子の帰還」の構図の中に立っているということを、今一度覚えたいと思うのです。

次回は「洗礼という選び、神の家族として生きる」というテーマで、このアガペーに応答して、信仰の決断をするとはどういうことか、そしてその決断がもたらす“新しい所属”について、ご一緒に味わっていきたいと思います。今週も、私たちの関係の中にアガペーが流れていくよう祈りながら共に歩んでまいりましょう。

【祈り】

アガペーなる神様、あなたがまず私たちを赦し受け入れてくださったことを、心から感謝いたします。私たちは、誰かとの関係に悩み、すれ違い、痛みを抱えることの中で生きています。ときに、自分も人を裁き、また裁かれてきました。でもあなたは、そんな私たちの姿を責めることなく、「そのままのあなたが大切だよ」と語りかけてくださいます。そのことばが、どれほど私たちの心を軽くし、新しく生きようという力を与えてくれることでしょうか。どうか今週、私たちのまわりにいる一人ひとりに、あなたのアガペーが流れていきますように。自分を責めすぎてしまう人にも、他人を受け入れられずに苦しんでいる人にも、あなたのまなざしと愛が届いていきますように。「もう一度、関係を結び直そう」「その人の背景にも心を寄せてみよう」そんな小さな決断を、私たちの内に宿らせてください。赦された者として、あなたの光の中をともに歩ませてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
罪ある者を、そのままの姿で受け入れてくださる、主イエス・キリストの恵み、
放蕩息子を無条件に迎えた父親の如く、我らの帰りを待っておられる、父なる神の愛、
赦された者として、隣人を理解する視座に立たせてくださる、聖霊の親しき交わりが、
ここに集う一人ひとりの上に、その家族と友人たちの上に、今も後も、とこしえまでも豊かにありますように。